



OBI 同窓会 NEWS Letter No.24

お茶の水聖書学院同窓会 2007年12月発行 東京都千代田区神田駿河台 2-1/03-3296-TEL1005, FAX4641

巻頭言 「とりなしの祈り」の特権

伊藤淑美 先生

同窓会の皆さん、初めまして。教師の伊藤淑美です。少しく自己紹介をさせていただきます。

2003年春に37年間奉職した聖契神学校を退職して間もなく、世良田先生からお声をかけられ、2004年からOBIでふたたび教壇に立つことになり、神学概論、日本キリスト教史、比較宗教の順で教えさせていただき、今年度は神学思想史(宗教改革から現代まで)を担当しております。4年が過ぎ去りましたが、途中で39年にわたり共に労した妻の入院と召天がありました。家族は二組の息子夫婦と孫娘が二人おり、私は単身で横浜線の中山に住んでいます。

ドイツのリーベン・ゼラーの宣教師の開拓で始まり、現在は日本キリスト教団に属している横浜清水ヶ丘教会の会員です。求道者会と子どもの教会でのメッセージ、「キリスト教と社会」という勉強会と年二回の聖書学校の講師を担当し、壮年会の聖研のアドバイザーもつとめております。

前置きが長くなってすみません。

私たちは、人生の色々なレベルで同窓会に関わりを持ちます。私も10年ほど前に、高校の同窓会に40数年ぶりに出席し、恩師を囲みながら共に食事をし、温泉につかって思い出話と近況報告をして帰ってきたのですが、懐かしかった、という感想しか残りませんでした。

キリスト者の同窓生(会)と世間一般のそれとの違いは、改めて言うまでもなく置かれた状況や立場は異なっても、利害を超えたかたちで、互いに祈りあえることにあると言えます。

「とりなしの祈り。これこそは神の子どもたちとして私たちが大胆に用いることのできるもっともきよいわざ、神との交わりと結びついたもっとも崇高な特権、喜びではないでしょうか」とアンドリュー・マーレーはのべています。(とりなしの奥義)。

各地に遣わされて主のため、教会のため、さらなる学びのために労している諸兄弟のために名簿やニューズレターを見ながら、主がさらに豊かな祝福を与えてくださるように心をこめて祈ろうではありませんか(ヤコブ5:16)。

また理事や教授、講師の先生方、在校生と事務の諸兄弟そして財政の必要が満たされるためにも、忘れることなく祈らせていただきます！

賛美歌440番の3節を引用して終わりいたします。

まなびの窓にて かたく結べる
むつびの鎖は 解くる時なし
海山へだてて 別れゆくとも
こころと祈りは 共に行きかい
世になす務めを 励みて尽さん



神学思想を学ぶ兄弟・姉妹と共に。OBIの学び舎で。

Merry Christmas! Happy New Year, 2008!



本校受贈生高島牧師から贈られましたリースです。写真撮影は世良田先生。

2007年12月6日 OBI クリスマス感謝会は、恒例、4階のOBI小ホールで、開かれました。「諸人こぞりて」(賛美歌112)の会衆讃美を以って、始められました。増田学院長の挨拶と祈りを以って、主にOBIの全てに感謝が捧げられました。

在校生に、研究科のOBを加え、御言と讃美の中、愛餐の一時を愉しみました。伊藤淑美師から「待ち望まれたクリスマス」と題し、ディポジションを賜りました。ヨハネ1章14節「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」の御言を中心に語られました。「インカーネーション」の語勢が心に深く刻まれ、厳粛な中に祝会は締められました。「きよしこの夜」を歌い、メリークリスマス!を互いに声を合わせて祝会は閉じられました。

後先になりますが、7月9日から11日にわたって、お茶の水聖書学院夏季セミナーが開催。横山武先生から「中世の修道院生活、十字軍について」学びました。10日午後の自由時間、**第12回お茶の水聖書学院OB会**が軽井沢・ウッドシェッドで持たれました。増田学院長、世良田、藤原副学院長をお迎えして、同窓生14名で、語らいの時を愉しみました。佐野兄も快気ご参加くださりました。西川姉(6期生)は、近く上田の教会でご奉仕、初めての参加でした。吉本姉は、同窓生新年の参加でした。兄姉の記念の言葉を記しておきました。

「交わり又楽し、雨の軽井沢」飯島多稼夫兄「学びを感謝しています。」増尾善文兄、邦子姉「聖霊による一致を守り続けなさい。(エペソ4:3)」中島總一郎兄「一昨年の今日は動脈瘤の手術を受けましたことを思い残された人生をしっかりと歩みたいと願って居ります。」佐野謙次兄「今年も学びに参加することができ感謝しております。」吉本瑠美子「お交わりと学びを感謝しております。」日名富子「OBIでの学び軽井沢のスクーリング心より感謝しています。」森本綾姉「お交わりを心から感謝いたします。『彼は望み得ない時に望みをいだいて信じました。』(ローマ4:16) 喜びをもって歩んでいます。」窪田淳子姉「『主を待ち望む者は新しく力を得、驚のように翼を駆って昇る事ができます。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。』(イザヤ40:31)共に楽しい学びの時を感謝!次回もまた。」森登兄「今年は雨の軽井沢、毎年表情のちがう軽井沢に出会えて楽しい思いをいだいて感謝!」三浦喜代子姉「昨年は出席できなかった

スクーリングと同窓会に出席出来感謝です。ますますのOBIの発展を祈っています。」浪井弘子姉「今回はすごく久しぶり(10年ぶりくらい?!)に恵みシャレーでのスクーリングに参加できて大変嬉しいです。今年の参加をまた新しいステップにして、主の道をまっすぐ歩んでいきたいと思います。」西川和子姉「親しき交わりを主に感謝します。」三浦秀弥兄

長崎殉教者の足跡の旅が9月27日から29日、二泊三日で迎られました。研究科前期は「キリシタンの受けた迫害と殉教」をテーマに増田学院長のもと、リサーチ・ディベートしてきました。その仕上げとして研修旅行を企画実行しました。「百聞は一見に如かず」多くの恵まれた旅となりました。主に感謝です。お証しの一部を、三浦喜代子姉が編集してくださいました。森登兄はスケッチ画をお土産に持ち帰りました。一部ですが、お分かち致します。

10月27日ペアンテ・ポーマン師の秋のチャリティ・チャペルコンサートに協賛。先の、長崎の殉教者の旅から、森登兄のスケッチ画、参加者の教会、記念物、遺跡などの写真、増尾邦子姉のみ言葉の掛け軸など9階ロビーに所狭しに展示されました。120名を越える参加者があり、台風之余波の中にも祝福されました。義捐金は10万円を震災を受けた新潟県の柏崎聖光教会へ捧げられました。

「真の闘うキリスト者として」 西川 和子(第6期卒)

主の聖名を崇めます。待降節(アドベント)の季節、OBIの先生方、学院生、そして同窓会の皆様、いかがお過ごしですか。

私は今、長野県上田市にある教会(上田新参町教会)で、信徒伝道者の働きをしています。この7月には10年ぶりに、恵みシャレーでのスクーリングに参加することができ、懐かしい先生方、同窓生方との旧交を温める機会が与えられたこと、本当に感謝いたします。

1998年春にOBI卒業後、翌年私はルーテル学院大学神学科に入学、そこで牧会カウンセリングや精神医学を学びました。2003年に東京神学大学に編入学、今年4月によりやくその大学院を卒業することができました。何と7年も学問の世界をひた走ってきたわけですが、私の原点はOBIなので「霊に燃え、主に仕える(ローマ12:11)」こと、主と教会とに仕えていくという基本理念を決して忘れたことはありません。私の場合、どういう形でということが何時も問題でしたので、真剣に祈り、主の答を求めつつ、学び続けていったのです。それが良い準備期間となり、丁度良い時(神の時=カイロスだったのでしょう。))に、主は私にふさわしい道を開いてくださいました。

9月に行われた日本基督教団の補教師試験に、合格することができたのです!お祈り、本当に有難う御座いました。正教師(聖霊典=洗礼、聖餐を執行できる。)になるまでには、あと3年ほどかかりますが、来年4月からは主任担任教師(牧師)として、新しい任地に遣わされるであろうと思います。

しかし、その前には葛藤もありました。月1回ほどメッセージの

奉仕をしていた、長野のホスピス病院からチャプレンとして来て欲しいとの声もかかったのです。その話は結局、病院側との話し合いがうまく進まず、道が閉ざされてしまいました。私は心底がっかりしました。ホスピスの現場なら、これまでの学びの経験を生かせると思ったからです。しかし、神の召命はあくまでも私を教会の場で、直接伝道者、説教者として立て、用いようとしていてと悟りました。できることなら、・・・と思っていた逃げは通用しないのです。

イギリスの詩人ミルトンは、(私の修士論文のテーマでもありました。)「アレオパジティカー言論の自由」(Areopagitica)の中で、次のような言葉を記しています。「何が正しいかを本当に識別し、選択していく人こそ真に闘うキリスト者(The true warfaring Christian)である」と。ピューリタン革命の最中、自身の信仰を賭けて文章家として闘った彼らしい言葉ですが、混迷する現代社会においても、まさに示唆に富んだ言葉ではないでしょうか？

何が神のみこころであるかを真剣に祈り求め、正しく選択し、勇気をもってその道へ献身していくことのできるキリスト者、伝道者として歩んでまいりたいと思います。

すべての栄光は主にお返ししつつ・・。在主。 2008年降誕節)

「聖書と人生」を受講 研究科 芳賀 功(第11期卒)

「聖書に照らして、キリスト者として生涯に起きて来る様々な問題を討論しながら、聖書が実生活に活かせる」目的で開設された「聖書と人生」。

今年4月で中島總一郎講師の一年間の講義は全て終わった。私の受講の目的は、彼が私と同じ教団で、以前からの友人で親交ある友であった。せっかく講師になったのだから聞いてやろうかという誠に不見識な態度であったのです。それに彼はOBIでの卒業は私より2年後輩であります。

しかし、私は信仰的にも知識においても彼に勝るものではなく、たったひとつだけあるとすれば、先輩であるというこの一点だけあります。自慢じゃないけれどもネ!! そして、彼に勝るものを強いて挙げれば、体重が多い位でしょう。

そこへもってきて誠にタイミング良く彼のライフワークである又最終出版?でもある「死と神の国」の出版であります。多少コマーシャルもこめて、これはすごいと思い、これが講義のテキストになっていることであります。私の教会(開拓中)でも受洗しているのですが、私が購入したにもかかわらず、家内も別に買っていたには驚いた。このような背景の下に、一昨年第一回の受講に栃木の地からあらゆる艱難を乗り越え(二時間半)て、学んでまいりました。ところが最初の講義は私を含めてたったの二人でした。もう一人は事務局の宮本姉。都合で彼女が欠席の場合、私とマンツーマンです。こんなの初めてですので幸運の一語に尽きます。そして私は彼の為にこの授業を守ろうという思いで一回も休まず出席したのです。又幸いにも一人加わって三人になった訳ですが、・・・。

私にとって最大のプラスはノートを執らないで済むということです。素晴らしいレジメが配布された事です。私はこれを自分の教会のメッセージに用いさせていただき本当に感謝でした。

特徴的には、必ず講義に入る前に、「このテーマに対してあなたの考えはどうか？」と質問されるのには参りました。必ず予習して自

分の考えをまとめておく、それがこの授業の良いところであり、又自分の新たな「聖書人生論」への再チャレンジが与えられる良きチャンスでもありました。ハレルヤ!

「教会史」の学び

米田由起子(第6期卒)

私が学院生のころ、教会史の講義は水曜日に行われていたと思います。水曜日は都合が悪く、教会史を学ぶ機会がないまま、卒業しました。いつか学びたいと思っていました。2年間のC型肝炎の治療が終わり、半年後「ウイルスが検出されず、完治です。」とのお言葉もいただき、体も元気になってきました。そして、今年の講義の中に火曜日午後の「教会史」を見つけ、大喜びで申し込み、14名の方々と一緒に学んでいます。

横山武先生の豊富な知識と深い洞察とともに、ユーモアの溢れる講義です。テキストはE・E・ケアンズ著の「基督教全史」で、687頁もの分厚い本です。7月のサマー・スクーリングで先生の「教会史再発見」を、学ばれた方もおられると思います。

講義の初回、「教会史とは何か」から始まり、古代教会史、パウロ、初代教会の後、教父の時代、異端、教会と国家、教会会議時代の教義・・・と学び続けています。横山先生は、「『教会史』は『週刊誌』よりおもしろい。」とおっしゃいます。先生の講義は楽しく、90分の時間はすぐ過ぎてしまいます。講義の始めにある「お楽しみクイズ」(一種の宿題のようなもので、指定されたテキストの箇所を100字くらいにまとめる)にも慣れてきました。

教会史二千年を一年で学ぶことは、なかなかできないことだと、学び始めてわかってきました。また「時代」が、どんなときにも教会に影響を与えていることが分かってきました。

イエスさまの直接の弟子達またパウロの時代から、脈々と続いてきた教会の歴史が今、私が所属している教会とつながっていることに、深い感動を覚え、ますます教会史の学びを深めていきたいと思うとともに、学ぶ機会を与えてくださったことに感謝しています。

「創世記」を受講して

日名富子(第13期卒)

私はOBIの学びが楽しみで、卒業後も継続しています。今年度は世良田先生の「創世記」を受講中です。

まず驚いたことに、先生は【契約の虹立ち映えて裁き去り】(9章)のように、各章の主題を、俳句によんでおられるということです。

講義は、天地創造から2章ずつ進み、ヨセフ物語に入ったところです。

ノアの系図や民族の分布など、やっかいな章も、決して飛ばしたりしません。資料や地図などを確認したり、記入しながらの気をぬけない授業になります。「物語」の章では、先生が、朗読劇風に再現されることもあります。

モリヤの山へ出かけたアブラハムとイサク親子の臨場感ある会話。

ヨセフが父の使いで兄たちの所に行った時、ヨセフの姿を見た兄たちがかわす激しい議論。今風の若者ことばでのやりとりが絶妙。

数千年前の出来事を身近に引き寄せてくれます。

また、私は今まで、イサクとリベカの夫婦関係などに解せないところがありましたが、人間味のある解釈を伺ってほっとしています。毎回、聞き逃すことのないように、ほどよい緊張感を持って受講しています。

キリシタン殉教のスピリット発見の旅

学院長 増田 蒼雄

2007年度研究科の課題をあれこれと考え巡らしているとき、摂理的に与えられたのが「キリシタン殉教史」でした。

実際、クラスが始まると、発表者の方々の熱のこもった取り組みと、クラスの熱心な応答に、主の導きであったことを確信させられたのでした。

そして、まとめとしての長崎への歴史検証の旅も喜びもって賛同され、情熱的なものへと膨らんでいったことは、まことに同慶のいたりでした。

旅の当初から私のうちに与えられた願望、期待は、キリシタン殉教のスピリットを発見したい、また、それに触れたいということでした。大浦天主堂、浦上天主堂、二十六聖人殉教地へと進むにつれ（ガイドさんの克明、かつ説得力のある説明とともに）強烈に迫ってくる感動的殉教理解ともいうべき心の揺れが起りつつあることに気づかされたのでした。

「一体、これは何なのだ。何が殉教者たちを死に従容としてつかしめたのだ。これは、ただごとではない…」と思いつつ旅を続けていきました。

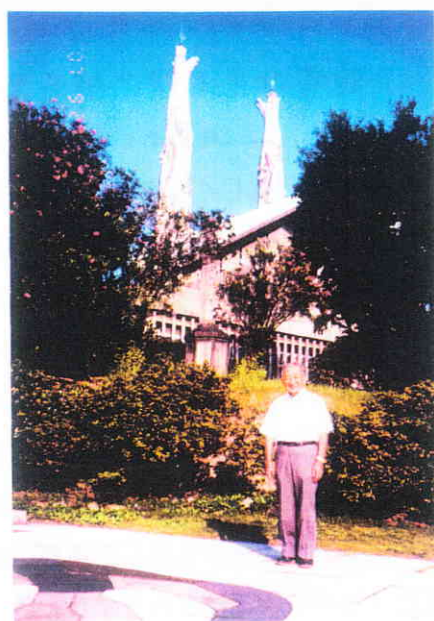
訪れる教会堂も、もはや歴史の中のものではなく、「今」話しかけてくるものになっていき、最初、歩きまわり、立って拝観していたものの、やがて、席に座り、ついに跪いて祈るように変えられていったのでした。

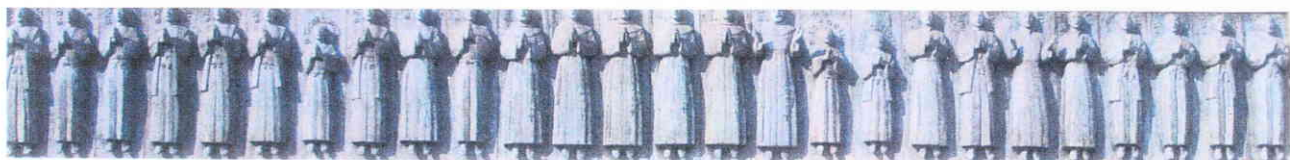
二日目、中浦ジュリアンの碑を訪れたとき、「この苦しみは、神の愛のため」ということばに捕らえられました。どういうことを言っているのか。神の自分に対する愛のためということなのか。それとも自分の神への愛のためということなのか。あるいは、両方かけて言っているのか。思いを深めていきました。

ちょうどその時、二十六聖人記念館入場券に「愛は死よりも強し」と記されているのが目にとまりました。そこに、中浦ジュリアンの言っている「神の愛」とつながるものあることに気づきました。殉教者の愛は、処刑によっても滅ぼすことができない。「死」に打ち勝つ「神の愛」——まさに、「死は勝利にのまれた！」のでした。（Iコリント15・54）。処刑された者たちこそ勝利者で、今も歴史のなかで生きて、そのように迫ってくる。こうして、殉教者のスピリット発見の旅は衝撃的に導かれていったのでした。

そして、ヘブル人への手紙の迫害記録が、キリシタン殉教に通じていることに開眼されたのでした。『また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、—この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした—荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました』

（11・36～38）





迫害の光と陰と闇を思う

三浦喜代子

——殉教者と隠れキリシタンと転び者——

迫害の嵐は悲しくも信者たちを三種類の群れに分けた。第一は殉教者、第二は隠れキリシタン、そして三番目は転び者（棄教者）である。

旅の一日目、三十度を超す強烈な日差しの中を長崎は西坂の丘に上がった。

二十六聖人のレリーフが力強く建っている。あまりの厳肅さに声も出ない。彼らは京都から極寒の西国路を裸同然で連行されてきたようだ。いったい、彼らの胸中を去来するものは何だったのだろうと、悲壮な気持ちになっていたとき、ガイドさんの声が耳を打った。彼らは処刑場が見えてくると、急に早足になり「いよいよ栄光の時が来ました」と喜びの声をあげたというのだ。

また「私の十字架はどれですか」と、己が十字架に駆けよって慕わしく口づけしたようだ。これにも私は声が出なかった。なんという勇者たちよ、彼らこそ真の勝利者ではないかと、ただ感嘆するばかりであった。彼らは迫害の光ではないか。おそろおそろ自分に問うてみた。いざというとき彼らのようにできるだろうかと。確信など皆無だが願望だけはある。光に憧れるのだ。

二日目。平戸から大橋を渡って生月島に渡り、島の館を見学した。

「納戸神」を目の当たりにした。家の奥の奥の納戸に、薄汚れてよれよれになった手ぬぐいほどの布きれがぶら下がっていた。はげ落ちたマリヤの像がみえた。（観音の容貌だった）これが隠れキリシタンが命がけで守った信仰の対象か。隠れの人たちは、表向きは仏教徒の振りをし、仏教の催事に参加し、死ぬとお寺に葬られた。偽りの生活をしながら、家族ぐるみ、集落ぐるみで徳川二百数十年を隠れ通した。私は隠された主を思って泣いた。

「信仰とは心に信じて義とされ、口で告白して救われる」のではなかったか。彼らには私の貧弱な想像力では描ききれない複雑な事情があったのだろう。しかし、隠れにはなりたくないと思った。彼らは迫害の陰ではないか。

三日目は長崎外海（そとめ）町にある遠藤周作文学館と『沈黙』の舞台を歩いた。

「人間がこんなに哀しいのに主よ、海があまりに碧いのです」の碑の前で眼下に広がる五島灘をながめた。遠藤は転び者を復権させた。確かに彼らに踏み絵を踏ませ信仰を棄てさせたのは、だれもが持ち合わせている人の弱さであろう。決して海の碧さのせいではない。が、彼らは陰よりも深い迫害の闇ではないか。いざというとき、キリストを否む者にはなりたくないと思っ強く激しく思った。

神さまが望まれるのは、はたしてどの群れであろうか。



「イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて彼らに言われた。だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そして私について来なさい。」

マルコ 8章34節

増田学院長よりみことばをいただき、キリシタン迫害の旅で、重要なものを感じ受けとることができかしらと、大きな不安がありました。

先生を始め学びを友にした方々と一緒に旅ができたので、緊張も和らぎ、ガイドさん、運転手さんのにこやかなお顔は、神さまからのプレゼントのように思いました。

長崎で、始めに遣欧少年使節の顕彰之像を見ました。伊東マンショ、原マルチノ、中浦ジュリアン、千々石ミゲルの4名は1582年にキリシタン大名の名代としてローマに派遣されましたが、彼らは外国へ行って目の開かれる思いをしたことでしょう。

大浦天主堂は2度目の訪問です。「日本の聖母の姿が美しく、日本に残る最古の教会」の建物の柱に目がとまりました。細目の丸太を3本位寄せ合わせて力とし、美しいぶどうの枝だの彫刻が見事でした。聖堂の天井の美しさが歴史の中に生き続けている様子が実感でき、心が静められて祈りへと導かれました。

信徒発見記念碑の前にたずみ、パリから来たプチ・ジャン神父の前に隠れキリシタンたちが現れて「あなたの心とわたしの心は同じ」と告白し祈る和服姿の日本女性の姿に、私も、プロテスタントですが、同じものを感じました。

26人殉教記念館に行きました。

1597年2月5日、西坂の丘で処刑されたキリシタン26人が船越保武氏の手によってリーフになり建てられていました。

圧倒される思いで十字架につけられた気高いお姿を偲びました。

記念館の中には、同じ船越氏の作品として高山右近の彫像が陳列されており、その気高く暖かい人柄が偲ばれました。最近、お茶の先生で牧師になられた方が本が出版されましたので読んでみたいと思いました。

バスの時間に合わせているので、時間が足りないほど見ごたえのある所でした。

ド・ロ神父記念館は忘れられない印象を受けました。

神父はフランスの地から日本に伝道に來られ、数々の事業を起こされました。1873年に印刷事業が始められ、救助院を創設し、パン、マカロニ、ソーメン、織物などの授産事業をして、飢饉に苦しむ村民に食糧や職場を与え、また、茶園を開き普及されました。それらを一つ一つ見せていただき、そのご苦労に感謝しました。

「わが選める者の労や空しからず」イザヤ65の23のみことばがしたためられていました。



〇7年9月27日～29日の三日間、〇BI同窓会主催の長崎キリシタン巡礼をした。それは、1549年にフランシスコ・ザビエルが日本の日本に初めて鹿児島に上陸して宣教し、日本最初の教会が建った平戸島、1587年の豊臣秀吉の伴天連追放令下、その10年後に殉教した26聖人が十字架刑にされた長崎・西坂の丘、この26聖人に献げるために建てられた大浦天主堂、1614年の徳川幕府による禁教令による厳しい迫害と弾圧に遭って、潜伏キリシタンとなり、250年以上たった1873年に明治政府によって高札撤廃で出てきたあとも、信仰形態を守り通して、現在に至る隠れキリシタンに生月（いきづき）島、これらの伝統を受け継ぎ、今もカトリック信仰が熱心に続けられている。原爆記念平和公園横の浦上天主堂などである。

研究科のメンバーを主体とする私たち一行13人が訪れた各地の教会の礼拝堂においては、各自それぞれの万感の思いをもって、ひざまづき、あるいは長椅子に座って祈りを献げた。小生も、カトリックであれ隠れキリシタンであれ「主は一つ、信仰は一つ、御霊もまた一つ」（エペソ四5、4）として、これらの人々の弾圧、殉教に耐えた信仰の積み上げなくしては、今日の私たちはないとの思いに深く感じ入り、しばし静寂の中に感謝の祈りを献げさせてもらった。

今回の旅の先々でキリシタンへの激しい迫害の歴史を魅せられた。その中であって強く心を刺したことは「殉教してまで彼らの信仰を守り通させたものは何であったのか」との間であった。耳、鼻を削がれ、手、足を切断される拷問を受け、火あぶり、穴吊りなどで処刑され、遺体は海に投棄されながらも棄教せず、信仰を守り通させたものは何であったのか。

迫害に遭うキリシタンに対し、指導する当時の神父はつぎのように教えたという。「からだを殺しても魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄の滅ぼす力のある方を恐れなさい」（マタイ十28）と。この御言葉は彼らを励ます力となったであろう。それよりも、殉教26聖人記念像の下に掲げられていた次の御言葉が、彼らに棄教させなかったよりどころであるとの一つの答を与えてくれる可能性が強い。「人若し我に従はんと欲せば、己を捨て、十字架をとりて、我に従へ」（マタイ伝十六24）。

いずれにしろ、殉教者の信仰を喜びのうちに支えたものは各自異なるであろうゆえに全部を知ることとはできない。しかし、彼らを支え、信仰を守り通させた究極的なものは、神と自分との結びつきを断絶させようとするものへの拒否であらう。

アブラハムがイサクを全焼の供物として献げよと神から命ぜられたとき、すべてを捨てて、最後に神との結びつきだけを保とうとしたようにである。

信仰は、論理でも期待でも人倫でもない。ただすべてを献げて、主と固く結びつこうとする信頼の関係のみである。



長崎西坂の丘にて 2007.9.27 芳賀 功兄 撮影

二十六聖人殉教の地

隠れキリシタンとわたしたちの信仰

亀井 正之(第2期卒)

9月の終わり、長崎隠れキリシタンのふるさとを訪ねる旅行は、良い天気にも恵まれ、とても気持ちの良いものであった。

隠れキリシタンを訪ねる旅であるから、必然的に都会から離れた人跡未踏といってよいほどの山中に近いところに行った。彼らは木々に囲まれた人があまり来ないようなところを住む所として選んだのであろう。空気もよくまた景色も良いところであった。昔の人たちはこのようなところで礼拝をしたのだらうと考え、その場所が何か尊いところのように感じてならなかった。

しかし、彼らの信仰はどのように継続していったのだろうか。大規模な布教でキリストを信じた後、突然の禁止命令であった。彼らはパラISO(天国)への憧れを抱かされた後、お上からの突然の禁止命令があったとしても、その夢を、その憧れを簡単に捨て去るわけにはいかなかったであろう。

また、頼りにする宣教師たちもやはり国外追放されたり、それでは逮捕されたりしてしまったのだ。おまけに、信仰を勧めてくれたお上は、「その信仰を捨てろ」と迫るのである。まさに彼らは二階に連れて行かれて、いや天国に、パラISOに招かれたと思ったら、「次にそこへは行くな、考えるな」といわれたのといっしょである。はしごを外されてしまったのである。

彼らは、信仰を捨てたことにして、形を変えて信じてゆくという他の例にない形で信仰を保っていかねばならなかったのだ。

その信仰の一つの形が、納戸さまということになったのであろう。納戸さま、納戸の中に日本人と化した母と子、マリヤとイエスの像の壁掛け(掛け軸)を隠して行事のときだけ出してみんなで拝むという、あの納戸さまこそ日本化したキリスト教であったろう。しかしそれはもうほぼキリスト教の面影をなくしてしまったものであろう。実際、以前の隠れキリシタンの宗教行事はほとんど地元の風習と変わりのないものとなっているようであった。

しかし、聖書には、「主の名を呼ぶ者はみな救われる。」

(ヨエ2・32使徒2・21、ロマ10・13)とある。伝わったキリスト教とは違っていても、また現代のキリスト教とは違っていても、彼らが主の御名を呼んでいることには変わりがなかったのではないだろうか。

わたしたちは、キリスト教を細かく定義し、少しでも標準と異なるものであれば、異教としたり、異端と決め付けたりして、自分たちの純粋さ?を、誇ろうとするのであるが、では、わたしたちは彼ら、隠れキリシタンたちのように、純粋に御名を呼んでいるだろうか。考えさせられるところがあるのはわたしだけであらうか。

今、御名を呼ぶのにだれも隠れたりしないでもよい。だれも御名を呼んだために死刑になることもない。堂々と呼んでもよいのである。だが、真剣に御名を呼ぶ者の少ないことよ。

OBI同窓会会計報告 (2007.4.1~11.30)

献金・雑収入	¥372,507	支出	¥281,933
前期繰越金	¥41,080	残高	¥131,654
		会計	戸川兄

献金者御芳名 (献金日順、ご芳名が複数回あります。)

依田和子姉 吉田和子姉 田澄子姉 有田貞一兄・美榮子姉 飯島多稼夫兄 伊藤洋子姉 繪嶋彰兄 窪田淳子姉 杉山礼子姉 田中恵子姉 戸川偕生兄 中島總一郎兄 浪井弘子姉 福井ちよ姉 増尾善文兄 松岡常子姉 三浦喜代子姉 三浦秀弥兄 森登兄 門馬正衛兄 吉村瑠美子姉 米田由起子姉 渡辺英子姉 上田留美子姉 猪狩友行兄 国東恵子姉 堀口容子姉 森本馥姉 三友庸子姉 中村良子姉 滝田幸恵姉 菅井正道兄 森井あずさ姉 伊藤洋子姉 黒沢すぎの姉 日名富子姉 染谷多真慧姉 永井みよ子姉 依田和子姉 国東恵子姉 中島總一郎兄 須田松子姉 脇坂勇兄 会田清美姉 杉山礼子姉 増尾善文兄・邦子姉 田中恵子姉 小川智子姉 三友庸子姉 尾原光彦兄 杉山礼子姉 内田光子姉 脇坂勇兄 佐野謙次兄 (以上延べ57件)

献金有難う御座いました。主に感謝します。御願みが皆様の上に豊かにありますように。

OBIの来春までの予定

2007.12.11~2008.01.04	冬休み
2008.01.07~02.15	授業週
2008.02.19	音楽科公開試験
2008.03.08	卒業式
2008.03.10	入学願書受付
2008.03.17	入学試験
2008.04.07	入学式・始業式
2008.04.08	新年度授業開始

編集後記

教会暦では、待降節を以って歳が改まると「教会史」の横山武先生から学びました。12月以前の事は去年、2007年は多忙ながら充実した日々でした。今回から伊藤淑美先生が登板くださり感謝です。巻頭言、クリスマスメッセージを頂戴しました。一昨年伊藤先生から日本キリスト教史を学びました。今回、研究科の学びに大きな指針となっていたことに気付かされました。有難う御座いました。

「長崎殉教者の足跡を辿る旅」は、別冊旅行記(三浦喜代子編集)

からの引用です。紙面の関係で一部しか記載できなく残念です。

2008年が御教会とともにOBIの働きが更なる飛躍、発展を遂げられますように祈ります。同窓生の皆様、御身体を大切に。編集子

Merry Christmas! Happy New Year, 2008!